

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	岩崎 人士
論文担当者	主査 竹島 泰弘
	副査 廣瀬 宗孝
	副査 若林 一郎
学位論文名	The Burden of Preventable Adverse Drug Events on Hospital Stay and Healthcare Costs in Japanese Pediatric Inpatients: The JADE Study (小児入院患者における予防可能な薬剤性有害事象が入院期間および医療費に及ぼす影響の検討：小児 JADE 研究)
論文審査の結果の要旨	
<p>薬剤性有害事象 (Adverse drug events: ADEs) とは、疾病によるものではなく、薬剤治療を通じて患者に生じた健康被害である。ADEs は入院期間や死亡の増加に関連するだけでなく、多大な医療費が費やされるため公衆衛生上の喫緊の問題である。申請者らは、エラーに関連して発生する ADEs (予防可能な ADEs) が、日本の小児入院患者において入院期間及び医療費に及ぼす影響を検討した。</p> <p>1,189 人 (12,691 患者日) の患者を対象に行われた多施設遡及的コホート研究である小児 Japan Adverse Drug Events (JADE) 研究のデータを用いて、予防可能な ADEs の発生頻度を算出するとともに、入院期間中に一度でも予防可能な ADEs を経験した群と経験しない群の 2 群における入院期間の比較を行った。医療費の検討は、厚生労働省の公的医療保険医療活動統計から、小児入院患者の医療費と推定新規小児入院患者数に関するデータを用いて実施した。</p> <p>小児 JADE のうち一般病棟に入院した患者 907 人 (総患者日は 7,377 日) を対象とした。年齢の中央値は 2 歳 (四分位: 0-7)、511 人 (56%) が男子であった。31 人 (3.4%) が入院中に少なくとも 1 つの予防可能な ADEs を経験していた。乳児と癌患者は予防可能な ADEs を経験する割合が高く、これら予防可能な ADEs を経験した患者群の入院期間平均値は 24.3 日 (95%信頼区間: 7.3-41.3)、経験しない患者群では 7.6 日 (同: 6.7-8.4) であった。予防可能な ADEs を経験した患者群では、14.1 日間 (同: 9.4-18.7) の入院期間延長を認め、延長したことにより発生する総医療費は 26,880,339 円と推定された。更に、この推定値を用いて、入院中に発生する予防可能な ADEs が日本の小児入院患者全体の医療費に及ぼす影響を概算すると、1 年あたり 34,615,806,492 円の医療費が、予防可能な ADEs の発生により費やされている可能性が明らかとなった。予防可能な ADEs を確実に予防するための構造的な対策は、医療安全の観点だけでなく、医療費削減の観点からも有効であると考えられた。</p> <p>本研究は小児入院患者における予防可能な ADEs が乳児と癌患者に多く、そのことにより 14.1 日間入院期間が延長することを示したものであり、予防可能な ADEs が医療安全および医療経済に及ぼす重要な知見を示したものである。よって学位授与に値する内容であると判断した。</p>	